

浅川の内水氾濫県調査へ

下流域長野・長沼の浸水分析

台風19号豪雨災害で千曲川に流れ込めず内水氾濫した県管理の浅川(長野市、上高井郡小布施町)について、県は19日、氾濫状況をコンピュータ上で再現・解析するシミュレーションをし、浅川に限った氾濫の影響を調べると明らかにした。浅川下流域の長野市長沼地区は千曲川の堤防決壊で広範囲に浸水したが、浅川に起因する被害を分



析。県の現行計画の想定を超える被害が推測されれば、治水対策を見直す考えだ。

【焦点3面に】浅川流域で今回と同じ降雨量があった場合について解析する。千曲川の本川からは越水や堤防決壊による氾濫がなかったと仮定。千曲川が基準を超えて増水し、浅川に県や市が設けた排水機場のポンプで千曲川に水をくみ出せなくなった今回と同様の条件で分析する。浅川のみ内水氾濫による浸水範囲を割り

出す。

県などが2013年に作成した「浅川総合内水対策計画」は、過去最大の被害があった1983(昭和58)年の台風と同規模の洪水に対し、宅地での床上浸水を防止することを目標としている。県河

川課の吉川達也課長は「シミュレーション結果でも床上浸水が確認されれば、新たな対策が必要になる」としている。

県は同計画で定める毎秒7トンの排水能力を持つ浅川の排水機場の増設計画について、来年度当初から設計を始める方針も示した。阿部守一知事が同日、浅川

の治水対策の強化を求めて県場の増設などの対策を早期に庁を訪れた加藤久雄長野市長実施してほしい」と要望し、との懇談で、今後の県の方針知事は「事業化を最優先で検討を説明。加藤市長は「排水機討したい」と応じた。

台風被害復旧に

長野市200億円超

補正予算案計上へ

台風19号に伴う千曲川の堤防決壊などで広範囲が被災した長野市が、市議会12月定例会(11月28日開会)に提出予定の本年度一般会計補正予算案で、災害復旧関連経費として計200億円超を計上する方針であることが19日、関係者への取材で分かった。同市の1回の補正額としては過去最大で、補正後の一般会計総額もピークだった2014年

度の約1656億円(歳出、決算ベース)を大幅に上回る1800億円程度になる見通しだ。

台風関連で市は10月30日、応急仮設住宅整備や排水機場(ポンプ場)復旧などに計47億7千万円を盛った本年度一般会計10月補正予算を専決処分。今回の補正予算案では、災害ごみや土砂の処分、道路や河川、学校などが被災した各種施設の復旧などに対応する。

一方、過去にない大規模な予算措置は、中長期の財政運営に影響を及ぼしかねない。市はこれまでの取材に「国の支援策を最大限活用したい」(財政課)としている。

氾濫浅川 岐路の治水

千曲川へ排水できず「想定外」

台風19号 浸水被害拡大

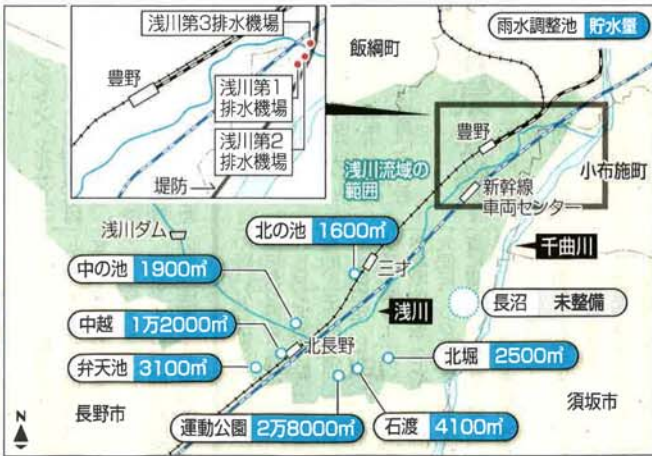
台風19号豪雨による長野市東北部の浸水は10月13日の千曲川の越水や堤防決壊による影響が大きいものの、県が管理する浅川の氾濫も浸水被害をさらに広げたとみられる。ただ、千曲川の水位が想定以上に増し、浅川から千曲川へポンプによる排水の停止を余儀なくされた。県は浅川の氾濫状況を分析するシミュレーション結果に基づいては現行対策を見直す姿勢を示す。洪水時に千曲川への排水が続けられないことを想定した「抜本策」を描けるかが問われる。

(立松敏也、望月真樹、木田祐輔、熊谷直彦)

台風19号で千曲川支流の浅川の氾濫など、浸水した長野市豊野町豊野(上)。下は水が引いた後の一帯。住宅地を抜ける道路や、川が姿を現していた。上は10月13日、下は11月5日撮影

焦点

県の現行計画 ポンプ頼み 限界も



「被災前の状態」に単に「被災後の状態」に戻すだけでは浸水被害に遭った住民は安心できない。地域、阿部守一知事は抜本的な被害の軽減策を進める方針を示した。19日、県庁応接室。



千曲川に流れ込む浅川(手前)沿いに立つ浅川第1排水機場(右端の建物)と第2排水機場=19日

台風19号豪雨による浅川氾濫の経過

12日	午後7時18分	国土交通省と県が千曲川の氾濫が浅川に逆流しているのを確認し、同省が合流地点の水門を閉じる
	7時45分	県が浅川第三排水機場のポンプ稼働
	8時00分	長野市が浅川第1、2排水機場のポンプ稼働
13日	午前0時8分	千曲川の水位が想定していた水位を超えたため、県と市がそれぞれのポンプを停止
	0時30分	浅川の水があふれているのを同省が確認
	0時55分	国土交通省が千曲川の越水を確認
	9時ごろ	県が浅川第三排水機場の稼働を再開。市は浅川第1、第2排水機場の運転再開を図るも、浸水で故障し動かず
	10時23分	国土交通省が千曲川との合流地点にある水門を開く

浅川を巡る主な洪水被害と行政の動き

1983年8月	浸水面積1.9㊦、床上浸水2戸、床下浸水224戸
同年9月	浸水面積248.5㊦、床上浸水331戸、床下浸水188戸
86年9月	浸水面積0.03㊦、床上浸水3戸
88年8月	浸水面積29.8㊦、床上浸水4戸、床下浸水165戸
95年7月	千曲川との合流部で隣接する鳥居川が氾濫
2000年9月	県が浅川ダム本体工事を発注
01年2月	田中康夫知事(当時)が「脱ダム」宣言
04年10月	浸水面積18.8㊦、床上浸水10戸
07年2月	村井仁知事(当時)が「穴あきダム」建設方針を発表
07年8月	国が穴あきダム建設を柱とする浅川の河川整備計画を認可
13年5月	県などが浅川の氾濫被害対策をまとめた浅川総合治水対策計画を作成
14年7月	浅川ダム本体完成

長野市が浅川流域に整備した雨水調整池の一つ「中越雨水調整池」。最大1万2000立方メートルの雨水をためられ、台風19号災害でも一時たまった。19日

避難中のリスクーTでどう周知

佐久市の柳田清二市長は19日の定例記者会見で、台風19号の接近時に避難中だった市民が避難したときの道中を「移動する」として、リスクをどう伝えるか、「検査」や「研究機関」などについて、別の男性1人が土のうを

受け取るために車で近くの小学校へ向かったまま行方不明となり、遺体で見つかった。男性の被災現場では、複数の車が国道の通行止めのために交差点から県道へ曲がったものの、その先も通行止めとなっていた結果、被災した。田市長は記者会見で、17日

浅川ダム

流域降水少なく 容量いっぱい

雨水調整池

容量いっぱい

氾濫防ぐ効果不透明

県が治水専用として浅川上流に設けた2017年運用開始の浅川ダム。大雨時に自然と水をためる仕組みの「穴あきダム」だが、県によると、ダム上流域の降水量が少なく、今回の台風ではほとんど水がたまりなかつたという。浅川ダムは10月12日午後2時半から水をため始め、午後11時に最大2847立方メートルをためた。しかし、ダムの総貯水量の110立方メートルと比較すると微量で、県は「ダムとしての効果が発揮される貯水量ではなかつた」とみる。浅川の氾濫対策を巡っては、長野市が浅川総合治水対策計画に基づいて整備した「雨水調整池」も効果を発揮したか不透明だ。市は浅川流域に7カ所、計5万3200立方メートルの容量を備える調整池を整備している。

市河川課は、調整池は浅川流域で大雨が降った10月12日中には水をためる効果が発揮していたと推測。しかし、

内水氾濫のイメージ

①本川から逆流
②逆流を防ぐためゲートを開ける
③氾濫を防ぐため、「排水ポンプ」で支川の水を本川にはき出す
④排水が追いつかない、またはポンプ停止のため氾濫

から水が逆流するのを県などが確認。国土交通省が逆流による浅川の氾濫を防ぐため合流地点の水門を閉じ、県と市が千曲川へ浅川の水をポンプで排出する3カ所の「排水機場」稼働し始めた。だが13日午前0時ごろ、千曲川が想定していた水位を超えて氾濫する危険性が生じ、国土交通省の要請を受けた県と市は全てのポンプを停止した。その30分後に同省側が浅川で水があふれているのを確認し、千曲川は同日55分に越水が始まったとみられる。県などが13年5月に作成した現行の治水対策「浅川総合治水対策計画」は、浅川で過去最大の被害をもたらした1983(昭和58)年の台風と同じ規模を想定し、治水対策を組んでいる。しかし、今回のように千曲川への排水がでなくなるとは想定していなかったのが実情だ。県は過去の浅川の氾濫対策について、排水ポンプの能力が不足していたことが主要な原因の一つだとみていた。このため計画の主眼も、ポンプ増設による排出能力の向上と、雨水調整池の設置などの対策

を組み合わせ、被害拡大を防ぐことだった。しかし今回はその想定とは異なり、上流から流れ込む水を排出できず、千曲川との合流地点付近であふれた。

同事務所の相河政登所長は、現行対策では「ポンプを停止した後は手の打ちようがない」と嘆く。県が同計画を作成していた当時、国土交通省も83年と同規模の洪水が発生しても水を防止・軽減するための千曲川整備を検討中だった。そのため、県は国による千曲川整備が進むのを見越して、排水できないことは想定しなかつたという。

同計画作成から1年弱の14年1月、国は「信濃川水系河川整備計画」を策定し、30年間をめぐりに千曲川を整備することとした。台風19号災害は、千曲川、浅川ともに整備計画の途中に想定を上回る事態が起きたこととなる。相河所長は浅川の氾濫対策には千曲川本流の整備も必要との認識を示しつつ「シミュレーションの結果をみて、浅川でどんな対策ができるのか考えていく」とした。

「被災前の状態」に単に「被災後の状態」に戻すだけでは浸水被害に遭った住民は安心できない。地域、阿部守一知事は抜本的な被害の軽減策を進める方針を示した。19日、県庁応接室。

東信

上田・角間溪谷の旅館 台風被害の傷深く

上田市真田町長の角間溪谷に通じる市道が台風19号で崩落し、近くの「角間温泉岩屋館」が、市内に約150軒ある宿泊施設で唯一、営業を再開できずにいる。見通しも立たないが、おかみの白石なみかさん(70)は「ここで踏ん張らなくちゃ」と宿泊客を迎える日を待ち望んでいる。



岩屋館に続く崩落した市道の前で再開への意欲を語る白石さん

待ち望む 宿泊客迎える日

「ここで踏ん張らなくちゃ」

岩屋館は1931(昭和6)年開業。茶褐色の炭酸泉と、溪谷の清水を温めた透明な湯の2種類が自慢だった。台風が上陸した10月12日は宿泊予約を事前に断り、白石さんは台帳とお金を持って避難した。

それまで岩屋館で寝泊まりしていたが、かつて両親が暮らした近くの家で過ごす。岩屋館に行ったのは2週間以上たった10月末。倒れた電柱や木でふさがれた道や角間川を徒歩で進んだ。

生い茂っていた木が流されて視界が開け、「全く別の世界にいるようだった。今でもキツネにつままれた気持ち」。旅館は内風呂の下の地面が川に削られ、露天風呂に続く階段の屋根は倒木で壊れた。

紅葉の季節は書き入れ時で、10月の予約はほぼ満室になっていた。断りの連絡を入れると、「再開したら絶対行きます」と言ってくれる客もいた。11月16日には地域のボランティアが岩屋館に続く道の倒木を片付け、崩落部分や川に倒木で作った橋やはしご

崎さん(☎0268・24・4881)へ。

地域の歴史 見て知って

上田・川辺小に「資料館」



戦争に関する展示などがある川辺泉田地域歴史資料館

上田市上田原の川辺小学校に、地元の歴史を伝える「川辺泉田地域歴史資料館」が完成した。住民有志でつくる実行委員会が同校と協力し、同校や近くの上田原資料館の所蔵品から計約300点を展示。戦争や学校、地域で盛んだった養蚕に関する展示がある。

戦争に関する展示は、近くの中之条にあった旧上田飛行場に関する資料が中心。練習機のプロペラ、地下工場を狙って米軍が打ち込んだ機関砲の薬きょうなどが並ぶ。約150年前のライフル銃は手に

取ることができると、新たな資料館は同校1階にあった郷土資料室を使い、展示を充実させた。他に、養蚕農家のいろりを再現し、同校所蔵の明治時代の教科書の展示などで郷土の歴史を学べる。

「目で見て触って感じて、戦争の悲惨さを知ってもらいたい」と実行委員会委員長の塩崎武彦さん(81)。「地域の歴史をリアルに感じてほしい。学校教育にも活用してもらえたらいい」と話している。

台風関連に5億8800万円

小諸市 12月市会に補正予算案

小諸市は、台風19号関連の復旧事業費5億8800万円を盛り込んだ本年度一般会計補正予算案を25日開会の市議会12月定例会に提出する。専決処分した2億1700万円を加えると、台風関連の予算額は8億500万円に上る。

補正予算案のうち台風関連の復旧事業費は、農地や農業用施設が2億4千万円、道路や橋、河川が3億4800万円。来年4月に完成を予定する小諸消防署の工事費減額に伴う消防費1億4800万円などの減額があるため、一般会計の追加総額は4億8500万円となる。

10月18日付で行った専決処分は、農地などの復旧事業費が7600万円、道路などが1億4100万円だった。

12月定例会は12月20日までの26日間。市側は16議案、報告1件を提出する。主な日程は次の通り。

- ▽11月25日 開会、議案説明
- ▽12月2日 議案質疑、一般質問
- ▽3、4日 一般質問
- ▽6、9、10日 委員会審査
- ▽20日 採決、閉会

佐久市12月定例会 一般質問 復旧作業を優先 代表質問だけに

佐久市議会は26日に開会する12月定例会について、例年は3日間行っている一般質問を、1日限りの代表質問に変更する。台風19号で被災し、答弁する側の市職員の業務が増える中、復旧・復興への作業を優先してもらう狙い。

2014年には記録的な豪雪後の3月定例会で、一般質問をやめて代表質問だけを行う日程に変更しており、それ

に做った対応。神津正議長は「事務職員の仕事が多すぎて多くなっており、負担を考えた」としている。

12月定例会は12月20日までの25日間。市側はふるさと納税の増収見通しに伴う返礼品の経費など3億3800万円を追加する本年度一般会計補正予算案など24議案を提出する。主な日程は次の通り。

- ▽11月26日 開会、議案説明
- ▽12月9日 代表質問
- ▽11日 議案質疑
- ▽13、16、17日 委員会審査
- ▽20日 採決、閉会

「農ボラ」大幅増 161人参加

長野の果樹園復興へ2日目



リンゴ畑で、長靴が埋まりそうなほどたまった泥をかき出すボランティア=19日午前10時10分、長野市大町

台風19号による千曲川の氾濫で被災した長野市東北部の果樹園で泥やごみを取り除く「信州農業再生復興ボランティアプロジェクト(農ボラプロジェクト)」は本格実施2日目の19日、県内外から161人が参加した。民間団体を中心とする実行委員会が会員制交流サイト(SNS)で「人手不足」をアピールするなどし、初日の31人から大幅に増加。現場では被災家屋のボランティアの一部が農ボラに回る動きもあった。

「多くの人に来ていただいた。所・長野市)職員の小林芳則さま本当にありがたい」。19日夕、んは、同市穂保のボランティア実行委に加わるながの農協(本)の受付場所ではほとといた表情で

人手不足 SNSで発信強化

話した。「まだまだ多くの悲鳴をあげているりんご畑があります」。18日の参加者の低迷を受け、実行委はフェイスブックで発信を強化。情報の拡散も呼び掛けた。19日は、農ボラの受付場所の農産物直売所「アグリながめま」に隣接する市災害ボランティアセンターの地域拠点「りんごサテライト」とも連携。午前には家屋の片付けが一段落したボランティアに午後からの農ボラへの参加を呼び掛けた。同市穂保の寺で消毒や片付けを手伝った静岡県焼津市の伊藤弘泰さん(73)は「(農ボラが)あるなんて知らなかった。私も含めてやってみようという人は多いと思う」と話した。本格的な冬が近づくと、ボランティアの確保は急務。同農協の小林さんは「人が多くなれば作業の進み方が違う。さらに情報を発信したい」と強調。市災害ボランティアセンターを運営する市社会福祉協議会の庭山透事務局長は「農業は営利事業に当たらないため現在は社協として農地へのボランティア派遣は難しいが、今後も農ボラとして連携、協力したい」と話した。農ボラについての問い合わせは実行委(☎0800・8497・5942、午前9時～午後6時)へ。

堤防復旧 住民と対話の場を

長野の長沼地区住民自治協、国交省に要望方針

台風19号に伴う千曲川堤防の決壊で被災した長野市東北部の長沼地区住民自治協議会(住民協)は19日夜、市内で対策本部会議を開いた。堤防の復旧工事に当たって地区住民の意見を反映するための対話の場を設けるよう、堤防などを管理する国土交通省に要望する方針を確認した。住民協によると、国交省千曲川河川事務所(長野市)の木村勲所長らが18日、同市穂保の堤防決壊現場を訪問。住民協役員らに決壊までの経緯や原因調査に関して説明した。役員らは決壊原因や堤防の強度などについて質問したという。住民協の柳見沢宏会長(67)は「赤沼区長は、国交省が住民との対話重視の姿勢を示している」と評価。その上で「住民にとって、堤防の復旧の在り方が今後地区で暮らしていく保証になる。住民の疑問を解決できるようにしたい」として、近く国交省に住民側の質問を投げ掛け、さらに対話を要望していくとした。

脱線の新幹線 線路に戻す

浸水車両 解体場所へ移動へ



長野の車両センター

JR東日本は、台風19号にした長野新幹線車両センター(長野市赤沼)で、脱線車両に伴う千曲川などの氾濫で水没



長沼地区4区の区長や副区長が参加した対策本部会議19日。一方、住民協は地区住民を対象にアンケートを実施。被災した住民の現状を把握し、国や県、市への要望を生かしていく狙い。無記名で「これまで以上に苦しかったこと」「何が必要か」「今後どうしたいのか」の3問を聞く。既に全世帯に質問票を配布しており、24日ごろまでに地区役員が回収、集計する方針だ。

脱線した浸水車両周りで進む作業19日午後2時46分、長野市赤沼の長野新幹線車両センター。を線路に戻す作業を始めた。解体する場所に移すために実施。現地では10編成(120両)が浸水して廃車が決まっており、このうち2編成(24両)が脱線していた。同社広報部によると、作業開始は18日。油圧ジャッキで車体を持ち上げて専用の装置で横にずらし、線路上に下ろす作業を19日も続けた。1編成につき約3週間かかる見込み。解体作業の場所や時期については検討中という。